

日語文專攻生後設認知能力培育之研究： 學生受期待之面向與潛在力喚起之分析

黃英哲

臺中科技大學應用日語系教授

摘要

本篇論文旨在透過對臺灣社會有關日語文教育相關活動之動向分析，以及透過對 35 名日語文專攻生參與課外活動後所產生之心境變化的解析，期盼能夠釐清日語文專攻生應具備的後設認知的內容，並從中探討提升其後設認知能力之策略。主要之結果可歸納為以下四點：1.臺灣日語教育界的最大自我期許為「創新突破」，而對日語文專攻生的最大期待則是「社會貢獻」。2.從「特質的發現、收穫、困惑、突破與否的反省、接受指導的期待、課外活動的需求」六個面向分析學生心境後發現，不少日語文專攻生們在人際互動能力上雖較為薄弱，但其實還蠻能適應新環境的。3.無論質與量的分析都發現課外活動有助於學生極大的成長，在 AI 工具等學習資源廣泛普及的現代社會裡，更需納入能讓學生體驗臨場感、存在感、挫折感、使命感與成就感之設計。而為引導學生發揮並提升後設認知能力，本文中提供了促使學生進行內省、反省、俯瞰、統合，並使其邁向自我成長的方法。4.具備適切之後設認知能力的學生，能夠在深化自我理解的同時，發展自主學習與邏輯思考，並透過克服弱點與提升自我調整能力，進而達到突破既有框架的境界。

關鍵詞：日語文專攻生，後設認知，課外活動，自省，策略

受理日期：2025 年 08 月 29 日

通過日期：2025 年 11 月 07 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202512_(45).0001

Developing Metacognitive Ability in Japanese Language Majors: An Analysis of Expected Dimensions and the Activation of Potential

Huang Ying-Che

Professor,

Taichung University of Science and Technology, Taiwan

Abstract

This paper aims to clarify the components of metacognition that Japanese language majors should possess by analyzing trends in Japanese language education-related activities in Taiwan and examining the emotional changes experienced by 35 Japanese language majors after participating in extracurricular activities. It also seeks to explore strategies for enhancing their metacognitive abilities. The main findings can be summarized in the following four points: 1. The greatest self-expectation within Taiwan's Japanese language education community is "innovation and breakthrough", while the highest expectation placed on Japanese language majors is "social contribution". 2. An analysis of students' psychological states from six perspectives—discovery of traits, gains, confusion, reflective breakthroughs, expectations of guidance, and the need for extracurricular activities—revealed that although many Japanese majors are relatively weak in interpersonal skills, they are in fact quite capable of adapting to new environments. 3. Both qualitative and quantitative analyses showed that extracurricular activities significantly contribute to students' growth. Today, where AI tools and other learning resources are widely available, it is even more essential to design activities that allow students to experience a sense of presence, existence, frustration, mission, and achievement. To guide students in developing and enhancing their metacognitive abilities, this study also proposes methods that encourage them to engage in introspection, reflection, overviewing, and integration, thereby fostering self-growth. 4. Students with appropriate metacognitive abilities can deepen their self-understanding while cultivating autonomous learning and logical thinking. By overcoming weaknesses and improving self-regulation, they are ultimately able to transcend existing frameworks.

Keywords: Japanese language major students, metacognition, extracurricular activities, self-reflection, Strategies

日本語専攻生におけるメタ認知能力の育成 —期待される側面と潜在力の喚起に関する分析—

黄英哲

台中科技大学応用日本語学科教授

要旨

本稿は、台湾社会における日本語教育関係の活動の動向の分析、ならびに 35 名の日本語専攻生が課外活動に参加した後に生じた心境の変化の分析を通じて、日本語専攻生に求められるメタ認知のあり方を明らかにし、その能力向上のための方策を検討することを目的とする。主な結果は以下の四点が整理できる。1.台湾の日本語教育界によって掲げられた最大の目標は「イノベーション」であり、日本語専攻生に対して最も期待されているのは「社会貢献」である。2.「特質の発見・収穫・困惑・突破に関する省察・指導への期待・課外活動のニーズ」という六つの側面から学生の心境を分析した結果、多くの日本語専攻生は対人関係能力においてやや弱い面が見られるものの、実際には新しい環境への適応力を十分に備えていることが明らかとなった。3.量質両面からの分析により、課外活動は学生の大きな成長に寄与することが確認された。AI ツール等の学習資源が普及する現代では、学生が臨場感・存在感・挫折感・使命感・達成感を体験できるような設計をさらに取り入れる必要がある。したがって、本稿では、学生がメタ認知能力を発揮し、かつそれを高められるように導くために、内省・反省・俯瞰・統合を促し、自己成長へと繋げるための方法を提示した。4. 適切なメタ認知能力を備えた学生は、自己を深く理解しつつ、自律的学習や論理的思考を発展させ、さらに弱点の克服と自己調整能力の向上を通じて、既存の枠組みを突破し得ると考えられる。

キーワード：メタ認知、日本語専攻生、課外活動、内省、方策

日本語専攻生におけるメタ認知能力の育成 —期待される側面と潜在力の喚起に関する分析—

黄英哲

台中科技大学応用日本語学科教授

1. はじめに

現代社会においては、ICT の発展により、インターネット、SNS¹、通信メディア、AI 機能が含む各種のアプリケーション、スマートフォンやタブレット端末等が広く普及している。このような環境において、外国語の学習は、意欲さえあれば、容易に入門できるだろう。しかしながら、日本語の学習を例とすれば、学習者が初・中級レベルを修了した後、さらに上級レベルに伸ばすのは簡単に到達するものではない。中級レベルから更に上の段階を目指す場合、日本語教師からの支援・誘導・指導、時には激励がまさにかけがえのない存在だと考えられる。こうした教師側の努力の効果を高めるためには、まず学習者のメタ認知（Metacognition²）に目を向け、その特性や課題の分析及び把握をすることが求められる。それらの研究作業を実施してはじめて、有効な指導方策の手がかりが得られると考えられる。メタ認知という語の由来、概念及び多様な側面からの解釈については次節で述べるが、ここではまず本稿における定義を提示する。すなわち、メタ認知とは、人間が自らの記憶・感覚・連想などを対象として思考できる点に特徴づけられ、従来の認知の枠組みを超えて俯瞰的に物事を捉える能力を指す。というのは、人間には思考過程において、自らが思考しているという事実を意識し、その過程や文脈を明確化させる能力が発達できるのである。しかしながら、その

¹ 2006 年に Mark Zuckerberg（マーク・ザッカーバーグ）が開発した Facebook（フェイスブック）が一般に開放されて以降、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の利便性が広く注目を集めるようになった。

² Flavell(1976)はメタ記憶（metamemory）という概念を定義し、これがメタ認知研究の基礎となった。

ような能力は生来的なものではなく、後天的に発達し、意識的な学習や経験、トレーニングによって伸ばせる能力である。事物や対人関係の処理において、大量かつ適切なメタ認知を生み出せるか否かは、個人によって異なる。日本語教育の観点から考えると、学習者が自らのメタ認知を自覚したとしても、その結果に基づいて論理的思考を実践しなければ、最終的には効果をもたらさない。したがって、筆者は、現代の日本語教育における教師の重要な役割は、各学習者のメタ認知能力を整理・分析・理解・発見・誘導し、さらに向上させることにありと考える。要するに、本研究では、日本語学習者のメタ認知能力は、教師による適切な働きかけによって誘発され、さらに向上し得るものであると考える。

そこで、本稿では、以下の三つの問題意識を設定し、それぞれの結果を求める。そのうえで、日本語学習者のメタ認知能力の向上を促す指導法ならびに授業実践の方針を考案したい。①台湾社会の日本語教育関連活動が示してきた方向性を整理することによって、現代の日本語専攻生に期待されるメタ認知能力をより明確にできるのではないだろうか。②日本語関連のコンテスト(競技)、ボランティア、通訳案内などの課外活動に参加した後の台湾の日本語専攻生の心理的な変化や軌跡の分析が、メタ認知能力の向上の訓練には繋がるだろうか。③デジタル化社会の日本語専攻生のメタ認知能力はどのようにあるべきか。以下、第二節では日本語教育の分野で研究されてきたメタ認知に関連する報告及び研究を概観した後、第三節では本研究における分析の対象と方法を提示する。第四節では、台湾の日本語教育界における活動の動向分析と日本語学習者のメタ認知能力の向上の訓練との繋がり(問題意識①)に焦点を当てて分析と考察の結果を報告し、第五節及び第六節では、日本語専攻生が課外活動に参加した後の心境変化とメタ認知能力の向上との繋がり(問題意識②)について焦点として、それぞれ量的研究と質的研究の面から考察の結果を報告する。第七節では、デジタル化社会における日本語専攻生のメタ認知はどのようにあるべきか(問題意識③)につい

て提示する。最後に、分析結果に基づいて日本語専攻生のメタ認知能力の育成に資すると期待される支援方法を提案する。

2. 先行研究と本研究との関連

メタ (meta) という語はギリシア語に由来し³、それについては多様な角度からの解釈が存在する。例えば、Skinner (1968) の self-management behaviors (自己管理行動)、Flavell (1979) の Knowledge about cognition (認知に関する知識)、span-estimation (記憶容量の予測)、regulation of cognition (認知の調整)、recall-readiness (想起の準備)、Brown (1987) の cognitive process (認知過程)、executive control (遂行統制)、self-regulation (自己調整)、meta-procedural re-organization (手続き的枠組みを超えた再編成)、reflected abstraction (反省的抽象化)、other-regulation (他者による調整) などが挙げられる。これらはいずれも、人間がある事象を思考する際に「より高次の水準へと超越する」という含意を持ち、自己の思考や言動を俯瞰的に省察し得る境地を指していると理解できる。例えば、SNS として世界的影響力を持ってきた Facebook が、2021 年 12 月 28 日に社名を Meta へと変更した事例も、個人・集団を問わず、既存の枠組みを突破し、自己を超えて高次の段階を追求することの重要性を象徴している。したがって、筆者は meta とは、一段上の階層に立って、自らの限界を超越することを意味すると考えており、本稿においては、Metacognition をメタ認知と呼び、人間が自己の思考、感情、自己評価、記憶、反省、判断を意識し得る能力として位置づける。

メタ認知能力の高い学習者は、相対的に学業成績も優れており (長坂, 2012)、学習態度も良好である (陳姿菁, 2023)。一方で、学力が比較的低い学習者は、学力の高い学習者のように効率的な学習

³ メタ (μετά) の概念は、古代ギリシアの哲学者プラトン (B.C.427-347) にまで遡ることができる。プラトンは「人間は自らの認知を認知することができる」、すなわち “cognizing of cognition” であると述べた。さらにアリストテレス (B.C.384-322) もまた、人間には「聴覚や視覚といった感覚能力の上位に、それらとは独立した力が存在する」と考えている。

方略を技巧的に用いることはできず、やや素朴で非効率的な方法を取る傾向にある。しかしながら、そのような学力の低い学習者であっても、自らのメタ認知能力を発揮し、自己が有効であるとする学習方略を採用している（郭毓芳, 2017）。

このように、「いかにして学習者のメタ認知能力を高めるか」という問いは、あらゆる教師が生涯を通じて追い求める最大の課題であり、また最も切実な探求目標だと言えよう。呉如恵（2018）は、学習者に「聴解練習頻度記録表」や「自然状況教材聴解練習チェックシート」を記入させることを通じて、学習者の以下のようなメタ認知的方略を効果的に高めることに成功した。すなわち、「学習目標の設定」、「練習計画の立案と実行」、「集中して練習に取り組むこと」、「理解度の自己省察」、「問題発見と自己改善」、「自己成長に向けた評価」である。呉如恵（2018）の研究は学習者の「吸収・理解」の側面に焦点を当てていたが、本稿ではその知見を踏まえ、日語学習者の「産出・表現」の側面に焦点を移して検討する。

さらに、Oxford（1990）が整理した外国語学習方略の中には、「メタ認知方略」と呼ばれるものがある。そこには「言語使用規則の発見」、「学習目標の確立」、「自己の弱点の認識」、「自己評価」などが含まれる。また、O'Malley & Chamot（1990）は、このような方略には「自己調整」、「目標設定」、「自己点検」が含まれると述べている。しかしながら、学生たちにとっては、これらの方略は必ずしも容易に実行できるものではなく、いわば「知るは易く行うは難し」の性質を持つ。実際に、羅濟立（2022）は、日本語学科の学生を対象とした読解方略の調査において、彼らがメタ認知方略を十分に活用していないことを明らかにしている。

これを踏まえ、本稿では、日本語専攻生のメタ認知能力をどのように誘発できるかについて、調査結果に基づいた方策を提案する。

また、李桂芳（2022）は学生の作文を分析し、メタ認知能力の高い学生は執筆に際して読者意識を重視し、明晰で理解しやすい文章を志向するのに対し、メタ認知能力の低い学生は読者意識に十分注

意を払わず、自発的な文章の自己修正も困難であることを指摘している。李桂芳（2022）は、学生同士がグループで相互に協働しながら文章作成を行うことにより、メタ認知能力を高め得ると論じている。しかしながら、学生が卒業した後には、個人として業務を遂行したり、自らの才能を発揮したりする場面が数多く存在する。そのため、本研究では特に、学生が個人としてメタ認知能力をどのように成長させるかに焦点を当てることとする。

3. 研究対象と方法

本研究の題材は以下の三項目がある。①台湾における日本語研究及び日本語教育に関連する「台湾日本語文学会」、「台湾日本語教育学会」、「台湾応用日本語学会」の三学会が歴年開催してきた国際学術シンポジウムのテーマ。②長年にわたり実施され、高い評価を得ている AGC⁴日本語プレゼンテーション大会の歴年のテーマ。③中～上級レベルの日本語能力を有する日本語専攻生 35 名が、日本語関連の課外活動に参加した後のアンケート調査及びインタビューの結果。上述の①及び②の研究方法は、実際に公表された大会の情報の収集・整理を行い、それら大会の主題について筆者が特色及び全体的な傾向を分析するものである。一方、③の研究方法は、質問紙調査と実際のインタビューを併行して実施した。表 1 は、③において調査協力の同意を得られた 35 名の日本語専攻生に関する基本的情報を示したものである。

表 1 調査協力者の基本情報

記号	JLPT の合格状況	当時の日本語専攻歴	日本語と関連した課外活動の参加	記号	JLPT の合格状況	当時の日本語専攻歴	日本語と関連した課外活動の参加
S1	N2	4 年	B	S19	N1	4 年	B
S2	N1	4 年	ABC	S20	N3	3 年	B
S3	N1	4 年	B	S21	N2	3 年	B

⁴ AGC 会社は日本のガラスメーカーであり、建築用ガラスやフッ素化学製品を主力製品とする。同社の台湾支社は、社会貢献の一環として、台湾における日本語専攻人材の育成及び日台交流の促進を目的に、台湾の大学生を対象とした日本語プレゼンテーション大会を実施している。それにより、若い世代の創造力と自己 PR 力の向上を図っている。

S4	N1	4 年	B	S22	N3	3 年	B
S5	N3	3 年	B	S23	N1	6 年	A
S6	N1	4 年	A	S24	N3	3 年	B
S7	N1	3 年	B	S25	N2	4 年	B
S8	N1	3 年	B	S26	N1	4 年	B
S9	N2	3 年	C	S27	N3	3 年	B
S10	N1	4 年	A	S28	N1	4 年	ABCD
S11	N1	5 年	C	S29	N3	2 年	B
S12	N2	5 年	C	S30	N3	2 年	B
S13	N2	3 年	C	S31	N3	2 年	B
S14	N1	5 年	BCD	S32	N1	4 年	A
S15	N2	4 年	A	S33	N3	2 年	B
S16	N2	3 年	C	S34	N1	6 年	B
S17	N1	6 年	C	S35	N2	4 年	A
S18	N2	4 年	AB				

調査及びインタビューの実施期間は 2 年間（2023 年 6 月～2025 年 6 月）にわたっており、質問紙調査の実施時期は 2025 年 5 月である。表 1 の整理結果によれば、35 名の調査対象者の日本語能力試験（JLPT）の合格状況は、N1：16 名、N2：10 名、N3：9 名であった。なお、JLPT の合格は必ずしも調査協力者の日本語の表現能力を直接的に示すものではないが、本調査では 35 名の協力者が中級後半～上級の日本語能力を有する目安として参照することとした。本稿において課外活動を示す記号と趣旨は、次の通りである。

A.日本語関連の課外競技では、日本語を伝達的手段として聴衆を納得させるために、話者自身の発想を口頭で表現することが求められる。B.入門日本語教室でのボランティア教師活動では、台湾の小学校三・四年生を対象として、日本語及び日本文化を指導することが目的となる。C.日本語通訳案内の活動では、訪台した日本団体や日本学者に対し、宿泊・食事・移動・試合などの手配を調整するとともに、必要に応じて通訳を行うことが求められる。D.作品創作活動においては、創作者が授業外の時間に資料収集やフィールド調査を実施するほか、時にはメンバー間で討論を行い、創作に関する共通認識を形成する必要がある。

本稿における質問紙調査と実際のインタビューは google フォームによる自由記述式の調査、メッセージアプリ LINE のやりとりのメッセージによる記述、そして対面インタビューの三つの形態が挙

げられる。調査に当たって、協力者の心境変化に関わるインタビューを含むため、研究倫理の観点から慎重な対応をしており、調査協力者の個人情報（氏名等）の漏洩を厳重に防止するとともに、倫理的配慮の妥当性については、学術倫理審査機関による審査を受け、その適切性を確認した上で実施している。インタビューする際、常に調査協力者の自由意思を尊重し、いかなる強制も行わない。また、調査協力者には、学習動機の向上や学習ストラテジーの強化に資する助言・支援を提供する体制を整えている。さらに、筆者は、今後得られた研究成果について、調査協力者に対して電子ファイル形式にて一部を送付する旨をあらかじめ約束している。表2は今回調査の焦点となる六つの側面と各側面における設問の内容である。

表2 自由記述式のアンケート調査の設問内容

調査項目	設問の項目の日本語訳（箇条書きの記入を依頼した。）
特質の発見	これらの活動に参加する過程や終了後に、それまで気付いていなかったご自身の強みや特性を感じたでしょうか。
収穫の発見	これらの活動に参加した後、ご自身のどのような能力が向上したと感じましたか？あるいは、思いがけない収穫があれば教えてください。
困惑を感じた部分	これらの活動に参加する過程で、ご自身の能力を大きく超えていると感じ、困難に直面した点があれば教えてください。
突破のための反省	これらの活動への参加を経て、現在の学習スタイルを打破するために、今後ご自身がどのような取り組みをすべきだと感じましたか。
指導の期待	学校の教師からはどのような指導を受けたいと考えていますか。また、学校ではどのような授業やカリキュラムを設けるべきだと思いますか。
課外活動のニーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な課外学習活動は、1回や2回に止まらず継続的に実施されるべきだと思いますか？そのようにすることで、自分自身の本質を発見し、能力の向上につながると感じますか。 ・授業以外に、大学の先生方にはどのような課外学習活動を取り入れてほしいと考えますか。

4. 日本語教育活動の動向とメタ認知力向上の関連

本節では、本研究の問題意識①、「台湾社会の日本語教育関連活動が示してきた方向性を整理することによって、現代の日本語専攻生に期待されるメタ認知能力をより明確にできるのではないだろうか。」について探る。「台湾日本語文学会」、「台湾日本語教育学会」、「台湾応用日本語学会」の三学会は、台湾における日本語教育及び関連人材の育成方針を先導する学術団体である。したがって、本調査に

においては、まず「台湾日本語文学会」及び「台湾日本語教育学会」については 2009 年から 2025 年までの約 17 年間、「台湾応用日本語学会」については 2022 年から 2025 年までの直近 4 年間に開催された学術シンポジウムのテーマを整理し、表 3～5 に提示した。

表 3 台湾日本語文学会大会テーマの変遷とメタ認知力育成への示唆

開催日	テーマ	方向性
2025.12.13	学際的日本語文研究	イノベーション
2024.12.14	台湾における日本語文研究の持続可能性	連結接続
2023.12.9	国際教育としての台湾日本語文研究のブレイクスルー	イノベーション
2022.12.10	SDGs に向けた日本語文学研究の展望	イノベーション
2021.12.11	ポストコロナの日本語文学研究	イノベーション
2020.12.12	日本語文学研究の境界線	イノベーション
2019.12.14	日本語・日本文学研究の人文知・社会知	社会事情への配慮
2018.12.15	台湾における日本研究の課題と展望—文学・言語・社会—	イノベーション
2017.12.16	社会的役割を果たす日本語文学研究の推進	社会事情への配慮
2016.12.17	日本語文学研究と社会との連携	連結接続
2015.12.19	日本語文学研究における「S 字カーブ」への挑戦	イノベーション
2014.12.20	学習者人口が急減する時代における台湾の日本語教育の課題	社会事情への配慮
2013.12.21	日本語教育を支援する日本語文学研究	連結接続
2012.12.15	日本文学・言語学・社会文化の協働的研究	連結接続
2011.12.17	グローバル化の中における日本語研究の展望	国際化
2010.12.18	国際化の進展に伴う日本語学及び日本文学研究	国際化
2009.12.19	日本語教育の活性化	イノベーション

表 4 台湾日本語教育学会大会テーマの変遷とメタ認知力育成への示唆

開催日	テーマ	方向性
2025.11.29	日本語教育：変えるべきこと・守るべきこと	連結接続
2024.11.9	日本語教育の 60 年—台湾の日本語学科が達成したものと今後の課題—	イノベーション
2023.11.25	DX 時代における日本語教育の挑戦と課題	ICT リテラシー
2022.11.10	『世界』に繋がるための日本語・日本語教育	国際化
2021.11.27	with コロナ時代の日本語教育を目指して	連結接続
2020.11.13	クリエイティブ・ラーニングを目指す日本語教育	イノベーション
2019.11.30	AI と日本語教育の会話	ICT リテラシー
2018.12.1	アクティブトランジションのための日本語教育を目指して	就職の競争力
2017.11.25	日本語教育におけるグローバル化	国際化
2016.11.26	日本語教育における言語と文化の融合	連結接続
2015.11.26	学習者主体の日本語教育の再考	イノベーション
2014.11.29	台湾日本語教育におけるイノベーションの探究	イノベーション

2013.11.30	台湾における日本語教育の再発見	イノベーション
2012.12.1	台湾日本語教育におけるジャンル別の新課題及び可能性	イノベーション
2011.11.26	台湾日本語教育におけるジャンル別の課題	イノベーション
2010.11.28	台湾・日本・韓国における日本語教育の現状と発展	イノベーション
2009.12.6	日本語教育のジャンルのひろがり求めて	イノベーション

表 5 台湾応用日本語学会大会テーマの変遷とメタ認知力育成への示唆

開催日	テーマ	方向性
2025.5.9	日本語教育の先端的な革新とその実践	イノベーション
2024.5.25	職業連携型日本語教育	就職の競争力
2023.4.29	ニューノーマル時代の日本語教育と日本研究	イノベーション
2022.4.30	コロナ下における日本語教育と日本研究の未来	イノベーション

表 3～5 の右欄は、三大会の歴年の国際学術シンポジウムにおけるテーマに含まれるキーワードを基に、筆者がこれらの学会が指向する方向性について考察したものである。これを更に可視化すると、図 1 のように分類することができる。(2009～2025)

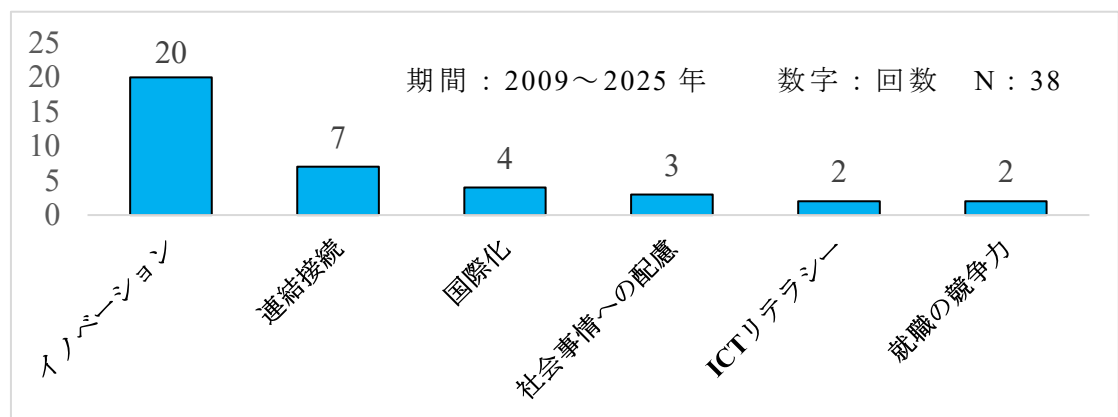


図 1 台湾の日本語教育関連の三学会の大会テーマから得られた示唆一覧

図 1 における棒グラフの順位は、各キーワードの強調回数に基づいて並べたものであり、そこから抽出された 6 つのキーワードは、社会からの期待の動向と需要の程度を反映していると考えられる。すなわち、イノベーション、連結接続、国際化、社会事情への配慮、ICT リテラシー、職場の競争力と言った能力の育成が極めて重要である。とりわけ、上位に位置する「イノベーション」や「連結接続」と言った側面は、台湾の現代社会において、日本語専攻生が強く求められている能力であると言えよう。

さらに、12 年間にわたり開催され、好評を博してきた台湾の日系

企業 AGC 日本語プレゼンテーションコンテストのテーマを分析の対象とした結果、歴年の大会の趣旨及び題目中のキーワードから、表 6 右欄に整理されている 5 つの示唆（社会貢献、世界の発展、台日の連携と交流、台湾の発展、環境問題）を抽出することができる。

表 6 AGC 日本語プレゼン大会テーマ（過去 12 年）とその示唆

回数	開催日	テーマ	方向性
第 12 回	2025.12.12	これこそグローバル化時代の○○○だ！	世界の発展
第 11 回	2024.12.13	もし私が○○○○になったらこんなことをしてみたい。	社会貢献
第 10 回	2023.12.15	AI を○○○○○に活用したら、～	社会貢献
第 9 回	2022.12.09	私が社長なら、こんなビジネスで SDGs の達成に貢献したい	社会貢献
第 8 回	2021.12.10	「日台共同プロジェクト」のご提案	台日の連携と交流
第 7 回	2020.12.11	台湾のこんな「○○○」を日本でも普及させよう！	台日の連携と交流
第 6 回	2019.12.06	世界における私たちの役割	社会貢献
第 5 回	2018.12.07	こんなのおかしい！○○○の解決策	社会貢献
第 4 回	2017.12.08	もし私が○○○だったら、世の中をこうしたい	世界の発展
第 3 回	2016.12.09	50 年後の○○○○○	世界の発展
第 2 回	2015.12.12	○○○から見た 50 年後の台湾	台湾の発展
第 1 回	2014.06.07	SAVE EARTH	環境問題

これら 5 つの示唆の出現頻度を図 2 に示した。

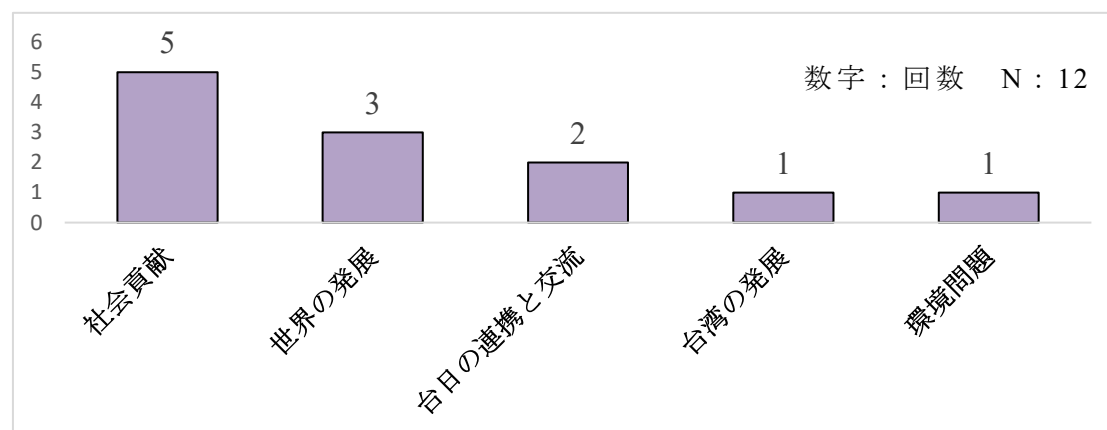


図 2 AGC 日本語プレゼン大会テーマによる方針導出の比較回数

このいわゆる産学連携によって実施されてきた日本語プレゼンテーションコンテストを、産業界を含む社会から日本語専攻生に対する期待の表れと捉えるならば、社会全体が学生に求めているのは、社会貢献、世界の発展、台日の連携と交流、台湾の発展、環境問題と言った側面の力であることが明らかになった。とりわけ、若い世

代による「社会貢献」は最も強く期待されている側面である。したがって、日本語及び日本文化関連を専攻とする大学の教員及び学生たちは、自らの高度な日本語能力や日本理解に関する専門性をいかにして人類社会の発展へ貢献させるかという課題に向き合い、自分自身の存在価値を再確認すべきである。

5. 課外活動参加後の心境変化の傾向性とメタ認知力向上との関連

本節及び第 6 節では、問題意識②、「台湾の日本語専攻生が日本語関連の課外活動に参加した後の心理的な変化や軌跡は、彼らの成長にどのような影響を与えるのか」に焦点を当てて、分析と考察の結果を報告する。コンテスト（競技）、ボランティア、通訳案内などの課外活動に参加した 35 名の日本語専攻生を対象に、特質の発見、収穫、困惑、突破のための反省、指導の期待、課外活動のニーズ、と言った六つの側面から考察を行った。以下は、5.1～5.6 節において、本研究の対象となった 35 名の調査協力者に対し、前述の 6 つの側面について自由記述式アンケート及び直接インタビューを行った後、筆者が整理した比較と分析の結果について提示し、5.7 節では課外活動参加後の日本語専攻生の心境変化の分析結果（5.1～5.6 節）に基づいて、日本語専攻生のメタ認知力の向上の方法について考察する。以下の図 3～8 の各棒グラフに示された項目は、調査協力者の記述内容を基に筆者が分類した結果である。

5.1 特質の発見

図 3 で提示した「適応力」とは、学生本人がこれまで経験したことのない場面や状況に置かれた際の状況の把握力、臨機応変力、自己の時間管理力のことを指す。この課外活動に参加した学生のうち、約 4 割(42.9%)が自ら新しい環境への高い適応力を有していることに気付いている。そして、約 3 割(31.4%)が自分には企画能力も備わっていることを発見している。すなわち、多くの日本語専攻生は、実際には我々日本語教師が想像している以上に、環境への適応力と創造力を備えていると言えよう。

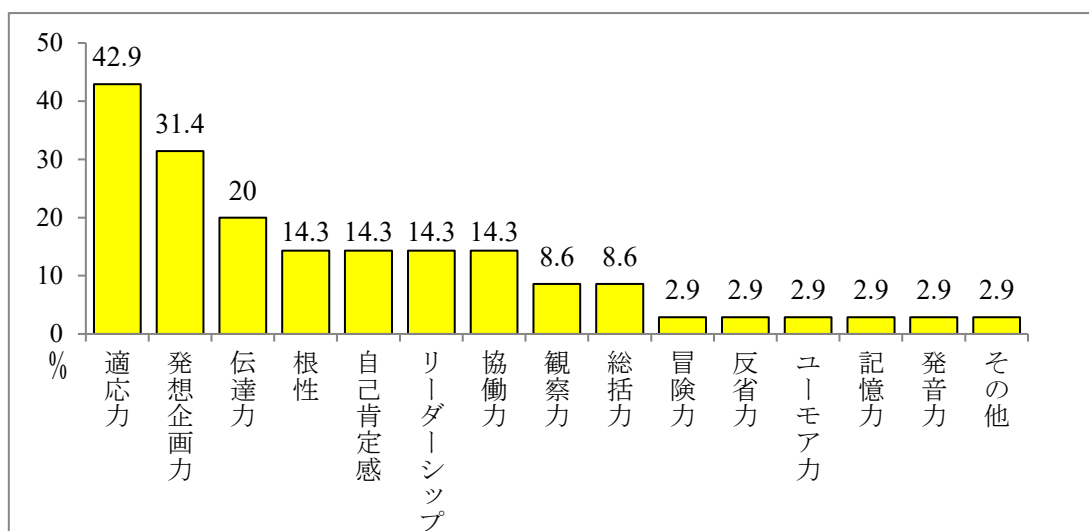


図 3 特質の発見状況 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

5.2 収穫の発見

図 4 は、日本語専攻生が課外活動に参加した後、自身がどのような収穫を得たかについての分析結果である。上位に挙げられた項目は、伝達力(51.4%)、協働力(34.3%)、指導力(25.7%)、思考力(25.7%)、自信(22.9%)、発想企画力(20%)などである。

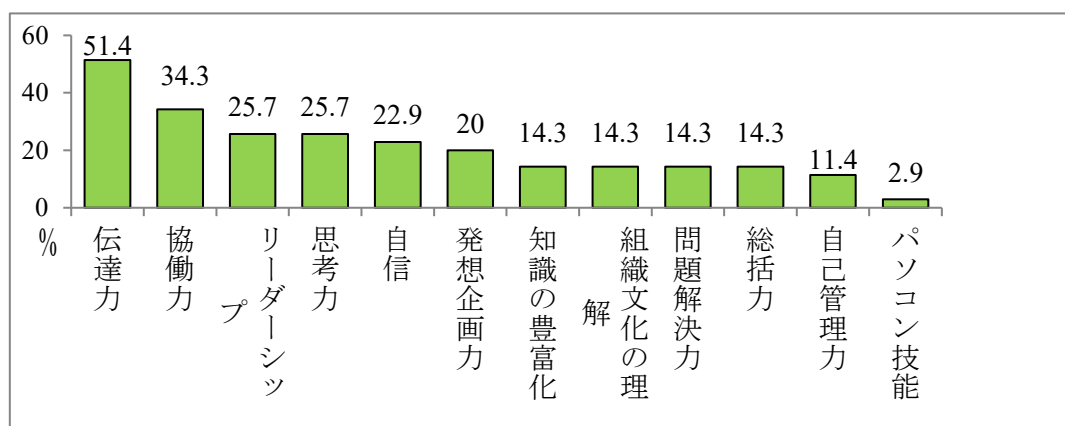


図 4 収穫の発見状況 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

5.3 困惑と感じた部分

これら 35 名が課外活動に参加する際に感じた困惑点に関する記述を分析した結果、図 5 に示す棒グラフによる比較図が得られる。

「困惑はなかった」、すなわち、無しと回答した者は全体の 2 割(20%)であったが、3 割ほど(31.9%)の回答者は対人関係が苦手だと指摘し、さらに約 2 割(22.9%)の回答者は日本語の伝達力が不足すると指摘した。

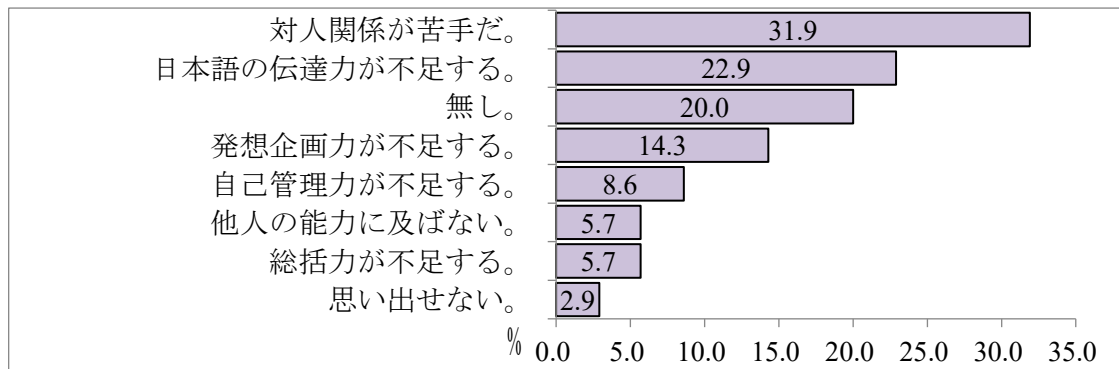


図 5 困惑と感じた部分 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

5.4 突破のための反省

今後もっと力を入れて改善すべき点について内省してもらったところ、以下の図 6 をまとめることができた。20 の反省項目のうち、日本語力が発揮できる場面を探すこと（22.9%）、関連情報と知識を身につけること（17.1%）、周りの人と物事を心を込めて観察すること（17.1%）、と言った 3 項目の反省点が比較的多くの調査協力者に取り上げられている。

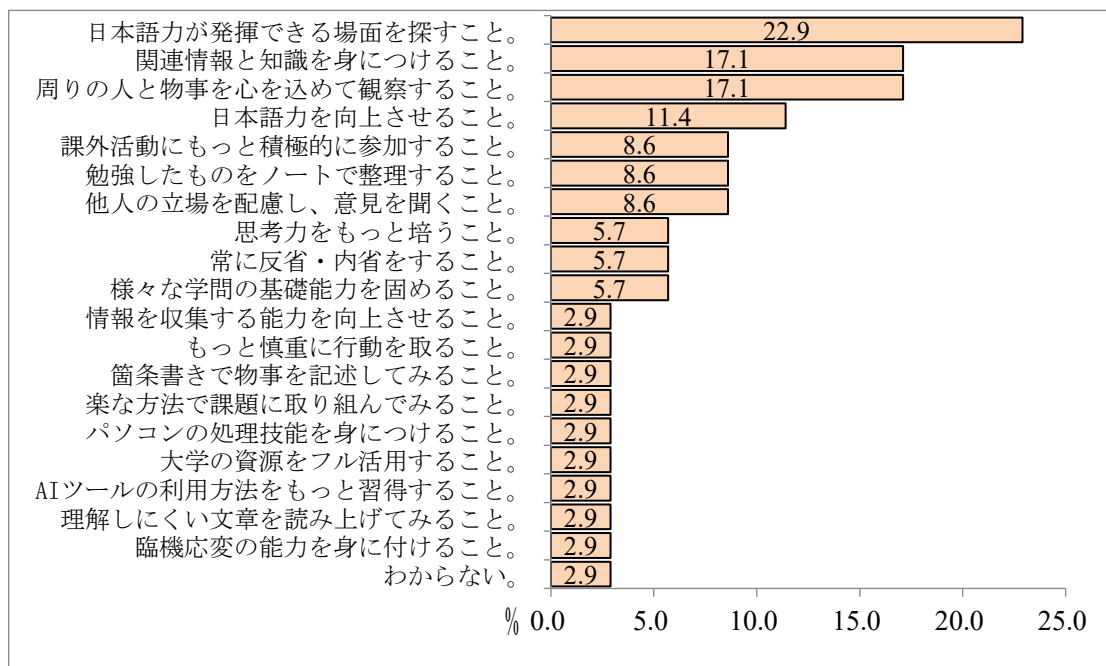


図 6 突破のための反省 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

5.5 指導の期待

教師や大学側の指導の期待について尋ねたところ、職場の用語が学べる授業、企画と調査報告が進められる授業、実際に練習できる機会がある授業、日本語による口頭伝達ができる授業を増やしてほ

しい、そして、何か解決できそうな活動、産業官庁での参観と見学、日本人と交流できる活動、卒業した先輩との触れ合いの座談があつてほしいなどと言った回答が比較的多い。本調査ではこれらの回答を同一の類型としてまとめ、「現実味のある授業」と呼ぶことにした。そこで、学生たちが教師たちに対する指導の期待について、図7の一覧図を作成した結果、16種類の指導上の方向性が見えてきた。

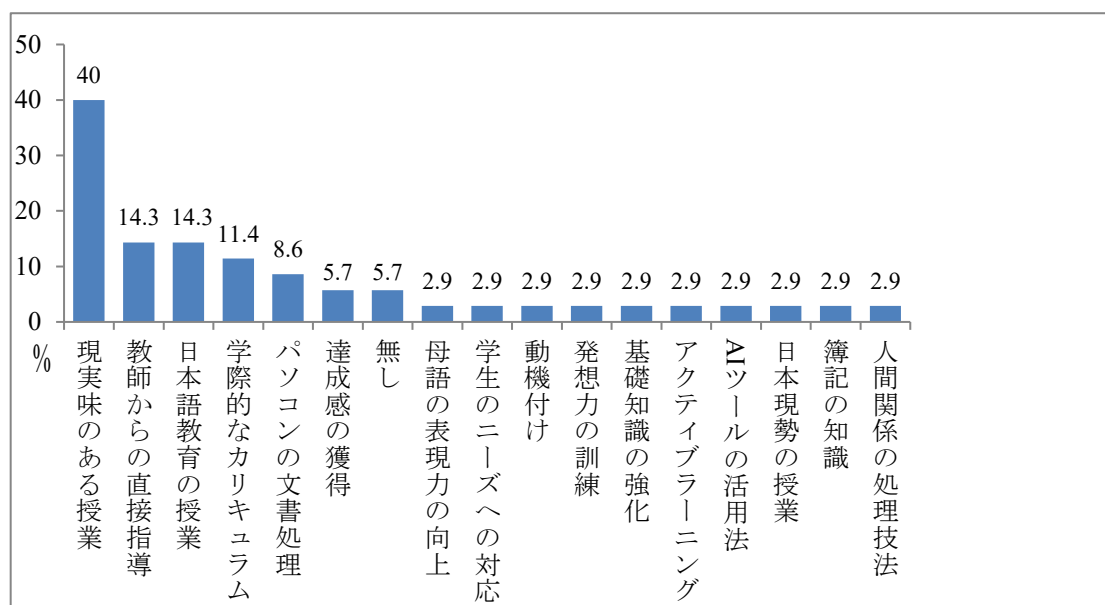


図7 指導の期待 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

そのうち、現実味のある授業があつてほしいという期待の比率がだんとつに高い（40%）ことから、学生たちがより実務に直結した授業内容や授業方法を望んでいることもうかがえる。それに続いて、教師からの直接指導、他人に日本語を教える技法、学際的なカリキュラムが比較的多くの学生が望んでいることも分かった。

5.6 課外活動のニーズ

課外学習活動を持続させる必要があるかを尋ねた結果、35名のうち34名が継続的に参加してはじめて効果があると答えている。課外学習活動のジャンルについて調査したところ、図8の棒グラフをまとめることができた。上位5位は、国際交流、産官界の見学、実習・インターンシップ、コンテスト（競技）への参加、講演・講座への参加の順であった。ここでいう国際交流とは、オンラインによる交流及び日本研修団の案内を含むものである。産官界の見学とは、

企業と政府諸機関の参観を指し、実習・インターンシップとは、国内外における短長期のインターンシップを含み、コンテスト(競技)とは、日本語専門性を活用できる学外コンテストを指す。

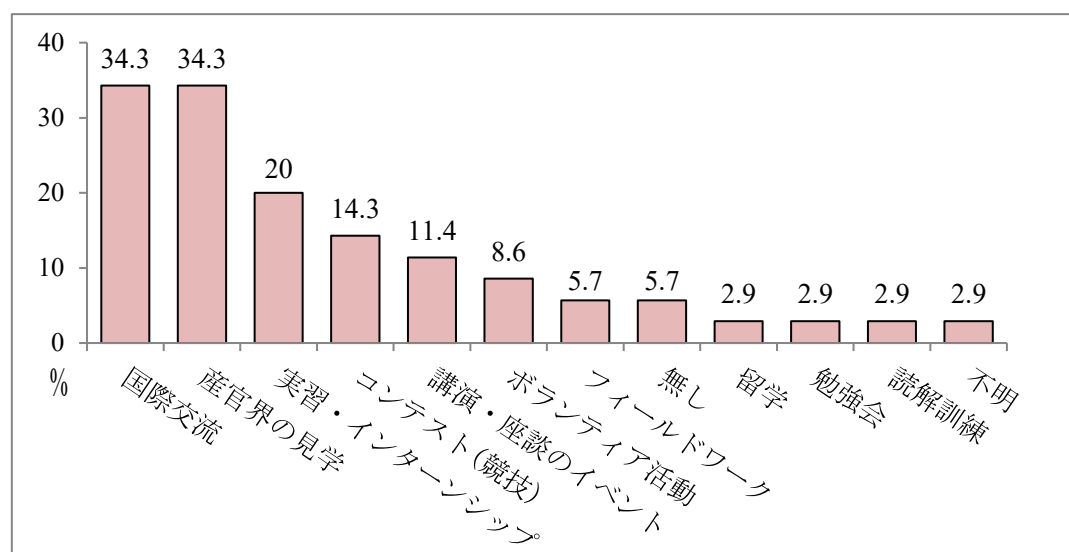


図 8 課外活動のニーズ 数字：パーセンテージ n=35 複数回答

5.7 量的研究に基づくメタ認知力育成の提案

以上、35名の日本語専攻生を対象に、特質の発見、収穫、困惑、突破のための反省、指導の期待、課外活動のニーズの六つの側面から自由記述式のアンケートを実施した結果を記述した。各側面の調査結果の要点を表7に整理して示す。

表 7 各調査項目における比率が高い回答内容のまとめ n=35

側面	分析の結果
特質の発見	新しい環境への適応能力が以外に高い(42.9%)。 発想・企画という能力が潜んだ(31.4%)
収穫の発見	伝達力(51.4%)、協働力(34.3%)、リーダーシップ(25.7%)、思考力(25.7%)、自信(22.9%)、発想企画力(20%)などが成長になった。
困惑と感じた部分	対人関係が苦手だ(31.9%)。 日本語の伝達力が不足する(22.9%)。
突破のための反省	日本語を実際に使える環境をもっと探すべきだ(22.9%)。 日本語以外の関連情報と知識を身につけるべきだ(17.1%)。 周りの人と物事を心を込めて観察すべきだ(17.1%)。
指導の期待	練習、見学、交流、調査、企画、座談など現実味のある授業があってほしい(40%)。
課外活動のニーズ	国際交流(34.3%)、産官界の見学(34.3%)、実習・インターンシップ(20%)、コンテスト(競技)への参加(14.3%)、講演・講座への参加(11.4%)などが比較的必要とされる。

表7のまとめを考察したところ、調査協力者のメタ認知の傾向について次の三点を整理することができる。①新しい環境への適応力、

そして発想・企画の能力が潜んでいる日本語専攻生は課外活動に参加したら、対人関係が苦手でありながら、表現・伝達力が向上したと感じているようである。②日本語専攻生として自分の語学力が発揮できる環境を探し、観察力を向上させながら、日本語以外の関連情報や知識を積極的に獲得すべきだという覚悟を持つようになっていようだ。③これら学生たちの期待とニーズについて具体的にまとめると、現実味のある指導、支援、活動、授業、手配が強く求められているとのことである。以上の観察結果から、現代化した日本語教育の現場には、以下のような省察が必要だと考えられる。

① 伝統的な授業モデルの限界

インターネットが普及する以前の世代⁵においては、教師と学生の双方が、一対多の講義形式の授業に慣れていたように思われる。当時の多くの教師は、正式な授業では学生は端然と着席し、理論上の訓練を堅固的に受けるべきであると考えており、学習動機や学習ストラテジー、潜在能力の喚起など、メタ認知能力に関連する指導や誘導については、学生が課外活動への参加を通じて自発的に獲得することを受動的に期待する傾向があった。

② 教師の役割の変化

しかし、インターネットの普及、スマートフォンの登場⁶、SNS や動画配信プラットフォームの興隆⁷、メッセージアプリや AI ツールの広範な利用⁸に伴い、日本語教師の役割は大きく変化している。現代社会における日本語教師は、知識伝達や疑問解消に加えて、学生

⁵ マイクロソフト (Microsoft) 社により 1995 年に発売されたパソコン向けのオペレーティングシステム (OS)「Windows 95」を契機として、インターネットが本格的に普及した。

⁶ 2007 年に Apple 社が開発した iPhone の販売以降、タッチパネル式スマートフォンは徐々に日常生活に不可欠な存在となっている。

⁷ 2005 年に開始された YouTube の動画サービスが脚光を浴びて以降、各種の動画配信プラットフォームも盛んになってきた。

⁸ メッセージアプリについては、WhatsApp、Facebook Messenger、LINE、KakaoTalk、WeChat、Zalo、Telegram、Discord、Signal などが挙げられる。なお、2011 年にサービスが開始された LINE は、台湾と日本で広く利用されている。OpenAI によって開発された ChatGPT が 2022 年 11 月に一般公開されて以降、各企業や研究チームが相次いで ChatGPT に類似する機能を備えた AI ツールを発表し、各種の AIGC (AI Generated Content) は急速に増加している。

の特性・ニーズ・動機を理解し、潜在能力を引き出し、さらには現実社会の多様な題材を授業に導入し、実務に触れる機会を提供することが求められている。

③ 学生の成長特性の変化

今回の調査結果からも、学生は教師の想定を超える創造力を有していることが明らかであった。3C 製品⁹に囲まれて成長した世代は、人間関係の構築や口頭での表現にやや不慣れな傾向が見られるものの、多くの学生は自己省察能力を備えていると考えられる。

④ 教育現場の改善の方向性

したがって、教師は授業において現実社会と関連する教材や題材を積極的に取り入れ、授業と連動した交流や視察を多く実施すべきである。また、課外競技大会への参加を指導し、国際交流や地域教育ボランティア、講演会・シンポジウムへの出席など、多様な活動に学生を参加させることが望まれる。

6. 課外活動参加後の個人成長と問題点とメタ認知力向上との関連

前節では学習者全体の傾向から彼らのメタ認知を検討したが、本節では学習者個々の特性の観点からそのメタ認知を考察する。学生たちが今回焦点となった四種類の課外活動に参加する過程において、自らを超える具体的な悟りを得たかどうか、或いは日本語能力向上の壁を突破する方法を発見したかどうかを徹底的に理解するために、本節では特に 13 名の参加者を対象に綿密な観察を行った。つまり、日本語関連の課外競技の場合の S2,S6,S10,S15,S23,S28,S32 の 7 名、入門日本語教室のボランティア教師に務めた S1,S33 の 2 名、日本語通訳案内に派遣された S14,S17 の 2 名、日本語関連の作品を創作した S11,S12 の 2 名の、計 13 名の参加学生の活動過程を密着に観察し、特徴的行動を記録した。その後、更に追跡的な半構造化インタビュー

⁹ 3C とは、ノートパソコンを含む Computer、スマートフォンを中心とする Communication、デジタルカメラなどの家電製品を指す Consumer Electronics の三語の頭文字 C を意味する。

一を実施した。以下、6.1～6.4 節において、それぞれ四種類の課外活動に参加した 13 名の日本語専攻生の特質、自己評価、成長・改善点について分析し、6.5 節では、更に、それらの結果に基づいて、日本語専攻生のメタ認知力の向上の方法について考察する。

6.1 日本語関連の競技

本節における観察及びインタビューの対象は、筆者の指導のもとで AGC 日本語プレゼンテーション大会に参加した日本語専攻生 6 名（S2・S15・S28 及び S6・S10・S32 の二組、各三名）と、WBC ビブリオバトル大会¹⁰に参加した日本語専攻生 1 名（S23）である。表 8 に示した三つの欄は、それぞれ活動前及び活動中における筆者による学生の個性に関する観察、活動後における学生自身の省察、並びに活動後に筆者が認めた学生の成長及び改善の必要性に関する記述を示している。

表 8 日本語関連の競技に見られる個人の成長と問題点

記号 など	学生の人柄に 関する観察	学生自身による 課題認識	活動後の成長・改善点 (観察者評価)
S2/F /N1	性格はやや短気で、物事を処理する際に他人の立場を考慮することができないが、アイデアが豊富で発言することが好きである。	物事の処理が丁寧ではなく、しばしば考えが不十分であるが、どう改善すべきか分からない。	日本語能力は更に一段上に向上したが、母語・日本語を問わず話す速度が非常に速い。理解不能なほど発音が不明瞭な場合もある。指導教師が繰り返し注意しても、その習慣を改めることができない。
S6/F /N1	自分に自信を持っているタイプであるが、謙虚に他人の意見を受け入れることもできる。	心を込めて観察すれば、自分の周囲の人や物事が創作のインスピレーションに満ちていることに気付いた。	他人からの意見を総合的に取り入れたうえで、面白いアイデアを生み出すことができるようになった。
S10/ F/N1	英語力が非常に優れており、外国語学習への積極性も良好である。	普段の学習では多くの日本語単語を一生懸命覚えているが、実際に口頭で表現する必要がある時には殆ど役に立っていないようだ。今後は、自分の考えを伝える表現方法をより体系的に身に付けるべきである。	論理的思考力や情報整理の能力が、明らかに大きく進歩している。

¹⁰ ビブリオバトルとは、参加者が自分の面白いと思った本を制限時間 5 分で紹介し、その後の聴衆との質疑応答を経て、最も読みたいと感じた本を聴衆の投票によって決定する知的書評合戦である。WBC (World Bibliobattle Championship) ビブリオバトル大会は、2025 年までに 9 回開催されてきている。

S15/ F/N2	試験の成績は優秀とは言えないが、言語の模倣力が非常に高く、日本語の発音も自然である。	口頭表現の勇気があることに気づいたものの、正しい文法運用の基礎力（母語を含む）がなければ、良い文章が作成できるはずはない。	普段の授業では教師の話聞き流しがちなであるが、競技の中での自らの課題に積極的に向き合い、例えば審査員の質問内容がよく理解できなかった点などについて知ろうとする。
S23/ F/N1	性格は内向的で、気性は安定しており、物事の処理方法を冷静に受け止め、判断することができる。	授業の進度や教師の指導をきちんと従い、日本語を高いレベルまで習得したものの、校外の大会に参加して初めて、自分の日本語表現能力には常に突破できない壁があることに気付いた。	自分のことをしっかり分析し、自分の望むことを口にできるようになった。また、人と積極的にコミュニケーションを取る勇気も増し、もう人前で萎縮する現象は段々なくなっている。
S28/ M /N1	授業に真摯に取り組み、成績も優秀で、学業と課外活動を両立させている。	何度も原稿を暗唱練習するうちに、内容を十分に理解し、自分の言葉で発表するほうが、単なる棒読みよりも自信が持てるようになり、発表内容もより魅力的で説得力のあるものとなる。	他者の意見を取り入れて整理・吸収し、その上で自らの方向性を見出すと、目標達成に向けて全力で取り組む傾向が見られる。すなわち、自らの特性を把握したうえで、それを発揮できる能力を有していると言える。
S32/ F/N1	目標を設定すると直ちに努力を開始し、人生設計に対しても積極的な姿勢を示す。	自分で書いた原稿を一度寝かせ、さらに繰り返し練習し、他者の意見を取り入れることで、これほどまでに成長できると思わなかった。	事前に準備した内容を正確に記憶する能力が高いが、実際の場面では緊張により相手からの問いかけを看過し、暗記した内容のみを提示する傾向が見受けられる。

これら 7 名の学生はいずれも個性が異なっているが、日本語関連の課外競技に参加することを通じて、それぞれが日本語専攻の学習過程において自身が成長すべき課題を自覚するに至った。筆者の記録、観察及びインタビューの結果を総合的に分析すると、学生たちは依然として容易には改められない習慣を有しているものの、日本語能力の向上に加えて、教室内の学習活動だけでは得難い学習の方向性や技能についても多くの示唆を得ていることが明らかとなった。総じて、整理・統合力、思考力、自律的な自己把握力、ならびにコミュニケーションにおける積極性はいずれも向上していると評価できる。

6.2 入門日本語教室のボランティア教師

本節の観察対象は、筆者の指導のもとで大学の隣にある小学校三年生の早朝の時間帯の日本語教室の教師を務めた S1 と S33 の二名

の日本語専攻生である。表 9 には、学生の人柄に関する観察、学生自身による課題認識、活動後に筆者が認めた学生の成長及び改善の必要性について整理した。

表 9 に示すように、S1 及び S33 は必ずしも学業成績が最上位に位置する学生ではない。しかし、彼女たちをこの種の課外活動に派

表 9 日本語教室のボランティア教師に務めた後の成長と問題点

記号 など	学生の人柄に 関する観察	学生自身による 課題認識	活動後の成長・改善点 (観察者評価)
S1/F /N2	成績は必ずしも最上位ではないが、明朗で発想力があり、対人関係や物事への対応において態度が良好である。	以前は日本語の学習は単調で退屈なものだと思っていたが、自分が講台に立ち、他者に教える立場になったときに、表現力・要点をまとめる力・論理的思考力の重要性に気付いた。また、それをきっかけに、人文系専攻者の存在価値について考え直すようになった。	臨機応変の能力には一定の成長が見られるが、長期的または繰り返し処理する課題に対して全体像を把握する力を更に高めることが望ましい。
S33/ F/N3	日本語専攻は第一志望ではなく、学業成績は必ずしも良好とは言えないが、小学生との交流を好む傾向がある。	小学生に日本語を教える過程において、日本語専攻の有用さを自覚した。そのため、今後は日本語専攻と児童教育の方向性を結びつけて努力していく可能性がある。	小学校に派遣され、朝の時間帯の日本語教室の教師を担当した際には、その活動が本人に適合していたと見られる。子供たちとの楽しい学習や交流を実現する多様な授業運営方法を工夫することができていた。

遣した結果、S1 は自ら習得した日本語を用いて子どもたちに指導する過程において達成感を得ると同時に、日本語専攻としての学びの価値を再認識するに至った。また、当初日本語学習に対する関心が比較的低かった S33 に関しては、日本語の学習を、自身が以前から強い関心を抱いていた「子どもとの交流」という活動と結びつけ得ることを自覚する契機となった。

これらの事例は、課外活動が学習者に対して自己効力感や学習動機を再構築する機会を提供し得ることを示唆している。とりわけ、学業成績のみでは十分に測定し得ない潜在的な成長可能性が、実践的な活動を通して顕在化する点は、教育実践上注目すべき意義を有していると考えられる。

6.3 日本語通訳案内

本節における観察及びインタビューの対象は、筆者の指導のもとで訪台の日本野球チームの宿泊、食事、移動、試合などの手配作業を中心に連絡したり通訳したりしてきた S14 という日本語専攻生と、訪台の日本人学者の見学と講演の通訳を務めた日本語専攻生の S17 である。

表 10 日本語通訳案内に務めた後の個人の成長と問題点

記号 など	学生の人柄に 関する観察	学生自身による 課題認識	活動後の成長・改善 点（観察者評価）
S14/ F/N1	明るく活発でアルバイト経験も豊富であり、社会性が高い一方、謙虚な面も見られる。	学校の授業内容だけでは、とっさの対応を求められるような体験の機会がないので、もっと自力で社会と接触する機会を探さなければならない。	課外活動における諸問題を円滑に解決する過程を通じて達成感を得た結果、自己全体としての自信が次第に高まっていくことが観察された。
S17/ F/N1	日本語を専攻して六年に及び、日本への渡航経験も多く、関連する事柄を自らよく管理・処理する能力を示している。	良好な日本語能力があれば十分だと思っていたが、業界や職場環境に対する理解も必要であることに気付いた。	もっと他者の立場に立って物事を考え、配慮を示すことができるようになった。

S14 と S17 は、日本語専攻の学習年数が長く（約 6 年）、いずれも日本語能力試験（JLPT）最高級である N1 に合格している。S14 は長年のアルバイト経験を通じて、同輩よりも社会化が進んでいる一方で、謙虚な側面も併せ持っている。また、S17 は家族からの支援と後援により、多くの訪日旅行や見学の機会を得てきた（表 10 参照）。しかしながら、このような背景を有するにもかかわらず、課外活動として短期の通訳・ガイドに派遣された際、彼女らは授業で得られる知識だけでは職場や社会の要求に十分対応できないことを認識するに至った。S14 は、学生自らが社会と接点を持つ機会を積極的に探すべきであると考えようになり、S17 は自身の業界や職場に関する理解の不足を痛感した。幸いにも、筆者の観察によれば、両名の優秀な学生はこの課外活動を経て、S14 は日本語専攻としての自らの能力で多様な事柄に対応できるという自信を高め、S17 は既に有する日本語の能力を基盤に、より謙虚な姿勢で将来の職業生活に臨もうとする意識を涵養するに至った。

6.4 作品創作

本節における観察対象は、筆者が指導を担当した日本語関連卒業制作の学生 S11・S12 である。ここでいう卒業制作は、教室の中で実際に授業を実施されず、課題の設定、内容の検討、調査、分析、成果物の制作及び発表に至るまで、学生が主体的に進める活動であり、教員側は助言や相談に応じるほうである。本研究では、このような活動も学生の自主的な課外活動の一形態と見做す。

表 11 作品創作に見られる個人成長と問題点

記号など	学生の人柄に関する観察	学生自身による課題認識	活動後の成長・改善点（観察者評価）
S11/ F/N1	寡黙でその内面の意図を読み取りにくい傾向が見られる。	1.面倒なので修正せず、教師からのアドバイスを無視した。2.他のグループが発表用のポスターに参考文献を載せていなかったため、自分たちも同じようにすればよいと判断した。	他者の感情や意見をより正面から受け止め、自らの見解を文字や言語を用いてグループメンバーに伝達できるようになった。
S12/ F/N2	自己の需要・ニーズを明確に表出できる特性を有している。	自分が最もよく知っている作品であっても、最初は中国語で説明しようとする傾向があった。しかし、教師の後押しを受けたことで、日本語で発表することができた。	問題解決の過程を通じて、自らの達成感を分析的に把握できるようになった印象を与えている。

S11・S12 の二名はいずれも日本語専攻歴が 6 年に及ぶものの、学習意欲が特段高い学生ではなかった。しかし、表 11 から見られるように、課外における制作活動の過程を経験したことによって、自らの学習上の惰性を省みる機会を得た。もともと寡黙であった S11 は、グループメンバーに対して自分の考えを積極的に伝えられるようになり、率直に意見を述べる傾向のあった S12 も、自らの学習成果を分析的に振り返る姿勢を示すようになった。

6.5 質的研究に基づくメタ認知力育成の提案

以上の 6.1～6.4 節において、それぞれ日本語関連の競技、ボランティア教師、通訳案内、作品創作の四種類の形態の課外活動に参加した 13 名の日本語専攻生を対象に、性格の観察、学生の自己課題認識の記述、成長・改善点の評価と言った三つの側面から考察・分析した。上述の三側面に関する分析結果を総合的に考察した上で、日

本語教育方針策定の参考となる提言を以下に提示する。

①課外競技への参加は学生の自主的な学習意欲を喚起する契機となり得る（S15）。②構造の認識と理解、そして全体を俯瞰する力の養成が極めて重要である。（S28）③教師は単に情報を詰め込むのではなく、自らが伝えたい、或いは既に伝えた内容を、いかに学生に効果的に吸収させるかを考え、工夫する必要がある（S12）。④他者の意見を幅広く受け入れる訓練の重要性が示される（S11,S12,S14,S6,S10,S32）。⑤学生に目的を持った学習課題を与えたり、明確な目標を設定した学習活動を提供することが極めて重要である（S1）。⑥教師は学習者により多くの臨場感や達成感を得られる機会を提供することが望ましい（S14,S17）。⑦学生が既成概念から抜け出せるように説得し、訓練する実践的な方法が重要である（S11,S12）。

また、学生自身が自己改善の必要性として述べた内容を手掛かりに、教育現場において対応可能な方法を検討することができるので、表 12 の左欄には、6.1～6.4 節の分析結果を基に 13 名の日本語専攻生が提示した自己改善課題の要点を整理して示した。これらの課題は、他の日本語専攻生にとっても共通して直面し得るものであると考えられる。筆者は、表 12 の右欄において、これらの課題に対応するために今後の日本語教育現場で実行可能な方策を提示し、学界に資することを期する。

表 12 学生の自己認識から得た教育への示唆

学生自身による 課題認識	教育現場への示唆
1.物事の処理が丁寧でなく、考えが不十分である（S2）。	①スモールステップで課題を分割し、確認のプロセスを設ける練習活動を企画する。 ②思考のチェックリストを導入する（例：「十分考えたか？」「根拠はあるか？」）。 ③グループ内で相互にフィードバックを行う活動を取り入れる。
2.観察からインスピレーションを得られる気付いた（S6）。	①写真や日常の出来事を題材にした短作文や即興スピーチを課す。 ②フィールドワーク活動を通じて観察力を鍛える。 ③創作活動（俳句、短文作成、短い会話シナリオなど）を導入する。
3.単語暗記が口頭表現に結び付かない（S10）。	①「単語→文→会話」へと段階的に活用する練習を組み込む。 ②ロールプレイで語彙を実際の場面で使わせる。 ③学んだ単語を使った「1 分間スピーチ」や「即答練

	習」を継続する。
4.文法基礎力不足で表現力が不十分である（S15）。	①文法復習を「実際の表現活動」とセットで行う。 ②母語、教師からの添削、AI ツールからの情報の三者を比較して自分の問題点を内省してもらう。 ③学生に、自分の文法理解が弱い部分や表現力が不足している点を整理させ、その結果に基づいて、的確な指導や活動を行う。
5.学外のコンテストや試合で自分の限界に気付いた（S23）。	①模擬大会や模擬面接の機会を授業内で実施する。 ②発表に対する段階的フィードバックを与える。 ③自分の「課題リスト」を作成させ、成長の可視化を支援する。
6.自分の言葉で話すことの重要性を実感した（S28）。	①暗記発表ではなく「要点カード」使用を奨励する。 ②即興的に要点をまとめる訓練を導入する。 ③録音や動画を用いて「棒読み VS 自分の言葉」の違いを比較してもらう。
7.作品ができては直ぐには提示せず、まず落ち着いて改めて内省し、他者の意見も聞いてみるべきだ（S32）。	①ピア学習（学生同士のフィードバック）を授業に組み込む。 ②改善のプロセスを振り返るリフレクションシートを記録させる。 ③他者の意見を受け入れるための「ディスカッション型授業」を導入する。
8.他人に教える立場で表現力や論理的思考力を実感した（S1）。	①ピアティーチング（学生が教師役になる）活動を導入する。 ②授業内でミニレクチャーを担当させる。 ③要点をまとめて他者に伝えるタスクを課す。
9.日本語教育と児童教育の連携に気付いた（S33）。	①教育実習や児童への模擬授業の機会を作る。 ②教育心理や児童言語習得に関する基礎知識を補助的に提供する。 ③「教えることによる学び」を授業に取り入れる。
10.教室を出て社会との接触をもっと実際にしてみるべきだ（S14）。	①学外学習（インタビュー、ボランティア活動、交流会）を導入する。 ②日本人留学生や地域社会との交流プログラムを企画する。 ③授業外活動の体験をレポートにまとめさせる。
11.日本語を長く勉強していても業界・職場理解が不足している（S17）。	①業界の専門家を担当授業の教室に招いた講演やワークショップを開催する。 ②長期のインターンシップにとどまらず、一週間ほどの職場体験も促進する。 ③「職業と日本語」というような開講や活動をする。
12.情性を持ち、教師の指導や指示をを軽視したことがある。（S11）。	①一方的に叱責するだけでは逆効果になりやすく、学生自身が「やらされている」のではなく「自分で選んで動いている」という感覚を持てるように仕掛ける。 ②小グループ活動を導入し、責任感を持たせる（仲間に迷惑をかけない意識を喚起）。 ③「問いかけ型指導」で受動的にならないようにする（例：「どう思う？」「君ならどうする？」）。
13.いつも母語依存の形で日本語の発表をしている（S12）。	①短文→要約→発表というようなステップで日本語での発表を段階的に練習させる。 ②発表前に「日本語表現サポートリスト」を提供する。 ③教師や仲間が支援しつつ「挑戦してみる」場を繰り返し作る。

7. 日本語専攻生のメタ認知のあり方

上記各節における分析結果に基づき、筆者は当初設定した「問題

意識 3：デジタル
 化社会における日本語専攻生の
 メタ認知はどのようにあるべきか」に対する
 答えを、図 9 の
 ように整理でき
 ると考える。す

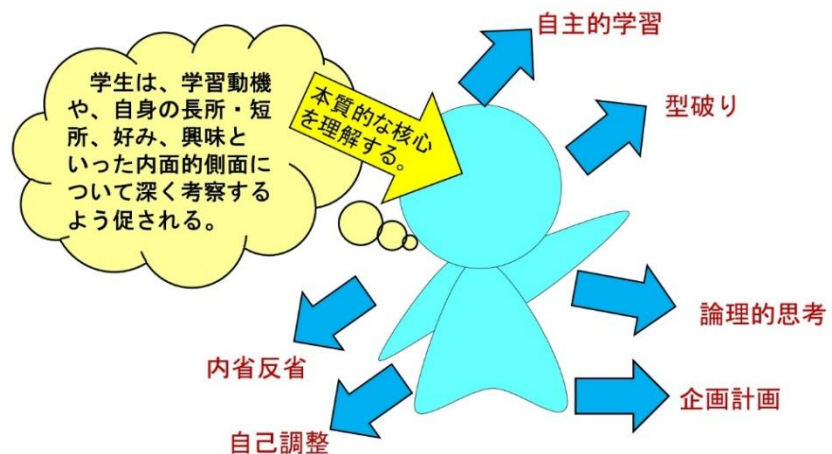


図9日本語専攻生の理想的メタ認知能力の発達モデル

なわち、適切なメタ認知能力を有する学生は、自らの内的な核心的本質についてより深く思考し、認識することができる。例えば、自身の動機、長所・短所、嗜好、関心といった内的本質について考えることが可能である。その結果、図 9 における外向きの矢印が示すように、より高い水準で自主的に学習し、自己を突破し、論理を発揮し、欠点を改善し、自己調整する能力を備えることができる。

8. おわりに

本稿では、台湾を事例として、社会的期待および日本語専攻生の現状分析を通じ、日本語専攻生のメタ認知能力をいかに育成できるかを検討した。設定した三つの問題意識に基づく分析と考察の結果、以下の点が明らかになった。

第一に、台湾の日本語教育関連活動の動向を通じて、社会が日本語専攻生に求めている力は、単なる言語知識や技能にとどまらず、社会貢献や国際交流、さらには連結接続や地域発展への関与といった広い視野に基づく能力であることが確認された。特に「イノベーション」、「社会貢献」への期待は顕著であり、日本語専攻生は自らの日本語能力や異文化理解の専門性を、人類社会全体の発展に資するものとして位置づけ直す必要がある。

第二に、日本語関連の課外活動に参加した学生の六つの面の心理的変化の分析から、従来の一方向的な講義形式では十分に涵養し得

なかったメタ認知能力が、活動を通じて自発的に鍛えられることが示唆された。すなわち、対人能力の面ではやや弱い日本語専攻生でも課題遂行過程において省察力や問題解決力を培い、自己表現や協働の場面で創造力を発揮していた。デジタル社会においては、教師は知識伝達者にとどまらず、学生の潜在力を引き出す支援者としての役割を果たすことが求められる。授業と現実社会を結びつけた体験的学習、課外活動への積極的参加の促進、交流やフィールドワークの導入は、その具体的な方策であると言えよう。

第三に、デジタル化社会における日本語専攻生に必要とされるメタ認知能力は、自己理解と自己調整の力に根ざしていることが明らかになった。自らの動機や特性を内省し、長所を伸ばしつつ短所を改善し、論理的に思考を組み立てる能力は、学習にとどまらず将来の職業的成長にも直結する。AI ツールやオンライン学習資源が普及する現代においては、こうした能力を基盤として自律的に学習を進め、変化する社会に適応できる人材の育成が急務である。

以上を総合すると、今後の日本語教育においては、①社会の要請を見据えた教育内容の再構築、②課外活動や実践的経験を通じた省察的学習の強化、③デジタル社会に対応した自律的学習能力の涵養、の三点が重要な課題となる。これらを実現するためには、教師自身の意識改革と授業デザインの変革が不可欠であり、また産学連携や地域社会との協働も強化されるべきである。本稿の成果は、日本語教育を「知識伝達の間」から「自己形成と社会的貢献を結びつける場」へと発展させるための一助となることを期待する。

参考文献

- 郭毓芳(2017)「初級日本語学習者における学習方法の使用実態—自由記述調査の質的分析を通して—」『東呉日語教育學報』第 48 期 台北：東呉日本語文學系 pp.48-77
- 吳如惠(2018)「練習記録表を用いた聴解訓練におけるメタ認知ストラテジー指導の試み」『東呉日語教育學報』第 50 期 台北：東呉日本語文學系 pp.58-87
- 陳姿菁(2023)「メタ認知と学習者の態度から『特級日本語会話』の學

- 習者の成績に影響を与える要因を探る」『東呉日語教育學報』第 56 期 台北：東呉日本語文學 pp.120-143
- 長坂祐二（2012）「『学習態度』に関する学習成果測定を試みーメタ認知の視点からの分析ー」『山口県立大学学術情報』第5号 山口：山口県立大学学術情報編集委員会 pp.21-27
- 羅濟立(2022)「日本語文学科生の読解不安についてー読解ストラテジーとの関連を中心にー」『台灣日語教育學報』第 38 号 台北：台灣日語教育學會 pp.88-117
- 李桂芳（2022）「プロジェクト学習で日本語文章作成のメタ認知と運用能力を高める可能性」『東呉日語教育學報』第 38 号 台北：東呉日本語文學系 pp.171-200
- Brown, A. L. (1987) metacognition executive control. self-regulation and other more mysterious mechanisms. In Franz E. Weinert: Rainer H.Kluwe(Eds.) *Metacognition motivation, and understanding*. London: Lawrence Erlbaum. Coyle,D., Hood,P. and Marsh,D. (2010) *Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Flavell, J. H. (1976) Metacognitive aspects of problem solving. In L. B. Resnick (Ed.), *The nature of intelligence* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 231-235
- Flavell, J. H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring: A new area of cognitive–developmental inquiry. *American Psychologist*, 34(10), 906–911.
- O'Malley & J Chamot, A. (1990) *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. London: Cambridge University Press.
- Oxford Rebecca (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Newbury House Publisher.
- Skinner B. F. (1968) Teaching Science in High School-What Is Wrong? Scientists have not brought the methods of science to bear on the improvement of instruction. *Science*, New Series, Vol. 159, No. 3816 (Feb. 16, 1968), American Association for the Advancement of Science pp. 704-710

〈付記〉

本稿は、異文化間教育学会第 46 回大会（2025 年 6 月 20 日～22 日、東京大学）における筆者のポスター発表「台湾の日本語専攻生のメタ認知能力の育成」を大幅に加筆・修正し、発展させたものである。また、調査にご協力いただいた学生諸氏ならびに、有益なご助言を賜った査読者の先生方に、ここに記して深く感謝申し上げる。